

## 佐伯雜記

(二)

## 増村隆也

九四

## 竜護寺の観音

慶長六年（一六〇一）高政が佐伯に封ぜられ養賢寺を建立した時、竜護寺の千手観音を養賢寺に移した。この観音は移す時意外にも重くなり、八人でやっと抱える程であった。

養賢寺に移した観音は毎夜のように仏壇から落ちてうつ伏せになり何回仏壇に納めても同じ事を繰り返して仏壇から落ちてうつ伏せになった。不思議に思つて高政に申し上げると御みくじを引いて見よとの事で、おみくじを引いて見ると竜護寺に帰ると出た。それでは和田坂（角石の上の山）に堂を建てて祀ろうと話して、おみくじを引かせてみると又竜護寺に帰ると出た。いざ帰るとなると観音は一人でもたやすく抱えられる程に軽くなった。高政はもつての外と立腹して仏に精があるなら一人で帰れと言って、家来に命じて和田坂から番匠川に投げ込ませた。仏像は川下に流れずに思いの外川上の竜護寺の方にと川に逆って上って行った。高政は益々腹を立ててこの仏には手が沢山あ

る、こんなに手があると盗みもしかねまい、手は二本あればよいと言つて二本だけ残して他はむしり取ってしまった。現在はこの観音の手を見ると合掌した二本の手以外は、後に修理して新たに着けたものである事が明らかである。

## 米水津粟島神社の世伝

鶴藩略史には粟島神社の世伝として次の如く書いてある。

正平十三年肥後守菊池武光が征西將軍懐良親王を奉して西下す、船遇々台風に逢い、土佐の南端遠く距てて漂流す。是に於て侍臣渡辺左エ門尉紀井に向つて遙かに粟島神社に祈りて曰く「神靈船を護りて以て地方に達せしめ給へ」と、須臾にして天風を回し船復内海に入り遂に豊後海部郡の海浜に達す。左エ門尉祠宇を茲に建て以て救援の恩を報ず。即ち今米水津村小浦浜のこの地なり」と書いてある。これによれば征西將軍が西下の時暴風に会い土佐沖に吹き流され、紀井の粟島

明神社に祈り漸く佐伯の米水津村の海浜に着き、そのお札にこの神社を建てた事が判る。

吉野朝時代に佐伯に懐良親王の如き人が見えられた事は特記すべきで、この粟島神社の社伝の他は、現在に伝えられていない時に懐良親王の記事が出て来るのは珍しい事である。

### 大友義鎮の遣明使竜護寺の清授

弘治二年（一五五六）鄭舜功は豊後を發ち帰国する事になった。舜功の帰国する時、大友義鎮は重臣等と議して、佐伯庄竜護寺住清授を正使とし、野津院到明寺住の清起を副使として同行させることになった。

清授は嘗て大徳寺に參学し、初め大友義鑑の菩提寺たる府内同慈寺萃岳院主であつたと云う。

清授等は琉球を経由して広東に到り、それより舜功と離れて潮州の海上に至つた時、兵により弓の攻撃を受け、批文を毀滅され、遂に獄に下された。

舜功は人を広東に遣り救助に当らせたが、舜功もまた幽禁されるに至り、清授は四川茂州の治平寺に謫流された。治平寺に抑留された清授は鄭舜功を深く頼っていたので鄭舜功は弘治三年と永祿二年に三度奏聞して釈放を尽力したが成功するに至らなかつた。従つて清授の末路は如何になつたか知るべき由もないが哀れな事であつた。

### 海賊と佐伯氏

平安朝中期以後に於て藤原氏は徒らに奢移遊樂に耽り政治を顧みな

かつた為治安は甚だしく乱れ、諸國に盜賊、強盜、海賊が起り、海陸共に交通は乱れるに至つた。斯くして起きたのが東國の武士と西國の海賊である。日本海史論に「西國地方の海賊は関東地方の武士と其の發生の動機を等しくするもので馬上勇士は武士となり、海上の闘士は海賊となつたに過ぎない。これ等海上の闘士として九州には後に現われる様に例えば対唐貿易の要津だつた松浦地方に松浦党が起り、豊後には大神氏の一族が臼杵、佐伯其の他の要津を扼していた。日向最古の豪族として奥北地方に雄飛した者も又この大神の一族（三田井氏）であつた」と記している。即ち大神の一族は臼杵、佐伯、延岡の地を扼して海賊を働いていた事が判る。これは海神（ワダツミノカミ）等の一族が、航海術にたけていた事、佐伯氏の先祖緒方三郎惟業（コレヨシ）が海軍を有していた事から考え得られる事である。

元寇以来支那との交通は杜絶し、後足利尊氏が天竜寺建立の資金を得る為に元と貿易を始めたが、西海諸國の海賊の跳梁は甚だしく是れが為貿易は中止するの止むなきに至つた。明の嘉靖四十年（一五六一）に羅漢元の書いた広輿図に入寇者は多く薩摩、肥後、長門の人で次は大隅、筑前、筑後、博多、日向、摂津、紀井、種島で豊後、豊前、和泉の人もある旨を記している。

### 大内氏の来寇

嘉吉元年（一四四一）六月赤松滿祐が将軍義教を殺してからは所々の城主、方々の國人は私の威を振り交える事が多く、同年八月十六ヶ國の太守大内氏は、数万の兵を率いて豊後に押し寄せて来た。當時豊後は第十八代大内親治の時代で、或は海に或は陸に之と戦を交へ

特に佐伯に於ては海陸の戦が幾度も繰り返えされた。大内勢が数多の

軍船に乗り、佐伯の堅田に攻め寄せて来た時は佐伯氏九代の惟世（コレッグ）は堅田の宇山城に然るべき武將を籠らせ、態と少数の軍勢を城下に出し、旗色悪く見せかけると、大内勢はこれを見て小勢なりとあなどり押しかけて討ち取り、軍神の血祭りにしようと城下に攻め寄せて来た。敵が城下に攻め寄せて来るまで佐伯勢は矢一筋も放たず城下に迫るに及んで宇山城内の貝の音を合図に長良権現山より三千騎、八幡山より五千騎同時に城中からも打って出で槍を合せて戦った。長良口の軍勢は横槍を入れて突き破り、八幡山の軍勢は柏江口に控えて大内勢を少し退かせた後これを後より取り巻いた為大内勢の軍勢は皆潮に追い込まれ利を失い、佐伯勢は大勝を得て兵船三百余を分捕ることが出来た。次で宮の内、代後浦に攻め寄せたが、敵を海中に攻め落して大内勢は大敗して退いた。当時誰の仕業か次の歌が戦場に建っていた。

逃ぐるるとせなかに疵を大内どの

軍の恥をかきつ元年

豊後衆にまけて見苦しすおう者

山のくちびる 色をうしのふ

### 佐伯惟治の書翰

佐伯氏十代梅牟礼城主佐伯惟治は大永年間大友に叛き、密かに肥後の菊池義国と筑後の星野親忠と通じて、共に府内（大分）に攻め入り、大友を亡ぼそうと企て未然に露見し、探題大友義鑑（よしあき）は怒って、その将曰伴長景（ながかげ）を遣わして梅牟礼の城を攻めさし

た。

長景は梅牟礼城の不落到業を煮やし、偽りの雲文を以て惟治を城よりおびき出し、新納党をして落ち行く惟治を擁護させた。この梅牟礼落城主惟治の手紙が下堅田河野氏に蔵せられている。

畑津並二郎左エ門尉持車塩月肥後守持に任せ奉持多々良遺す可く候  
恐々謹言

三月四日

惟治 花押

餅原監物亮

この手紙は佐伯地方に残る室町時代の唯一の古文書で、仲々達筆に書かれている。この手紙は畑津と二郎左エ門の持っている車を塩月肥後守持とし、本と言う者の持っている多々良を餅原監物亮に与えると言うのである。多々良と言うのは鉄等の鉾石を溶かすに用いる「フイゴ」の事で、此の手紙から考えると大永の昔、鉄等の鉾石を佐伯地方で精練していた事が窺われる。これは先住民族が二千年の昔城下で製鉄を行っていた事から考えれば、相当時代も下って来て当然の事であると思われるが、佐伯に残るものとしては珍らしい古文書で、佐伯の文化史上見逃がすことの出来ない文獻と云ってよい。

### 潮谷寺阿彌陀如来

昔佐伯の舟が土佐から帰る時一人の出家が磯辺に立っていて、その舟は何れへ行く舟かと尋ねた、船頭がこれは佐伯に行く舟だと答えると、是非便を貰いたいと出家は舟に乗った。舟が佐伯のスカのある所を通る時出家は茲で下して貰いたいと云った。船頭が茲は船の止る所ではない、茲から一里ばかり先の古市が船の着く所だからそれ迄待た

りたいと云うと、出家は私は茲で上るからとヒラリと海の中に飛び込み、大きな白蛇となって陸へ泳いで行った。船頭は驚いてその後を追ったが、汐月の森の中で見失なってしまった。

其から一年後汐月の森の中で、大蛇の抜けがらの上に、仏像一体あるのを見出し、昨年古市の船頭の話した大蛇であらうとその附近を探すと更に尾の抜けがらを見出し、神に祀る事にし尾と共に祀るのであるからとて社の名を尾長良神社と名づけた。

その抜けがらの上に在った仏像を高畑の百姓が祀っていたのを、瀧谷寺の登誉が譲り受け、潮谷寺に移したのが現在の瀧谷寺の本尊阿弥陀如来であると云う。

土佐から出家を乗せて帰った船頭は古市の佐脇次郎左エ門と云い、その子孫は古市に住んでをり、出家が白蛇となって陸に上った所を蛇崎と名付けられ、尾長良神社は現在の長良神社だと云う。

### 津久見赤八幡の御神体

足利尊氏が九州に落ち再び勢を得て京都に攻め上る時、尊氏は赤八幡の御神体を母衣(兜の中とも云う)の中に入れ、御守として湊川の戦に臨み大勝を得たお礼に尊氏は赤(閻伽)八幡に三殿を築いて献納したと云う。

尊氏のお守にした御神体は背の低い御神体であった。その後天正十一年大友宗麟が切支丹にこり神社仏閣を焼却した時、赤八幡もその厄に遇って焼却したが、津久見の大庄屋西郷帯刀信秀は御神体三体を自分の邸内に埋めてその難を免れしめた。

その後動乱の打続く内に掘り出されもせず、慶長六年高政が佐伯に

封ぜられ赤八幡を再建した時、掘り出して御神体に祀ったのは背の高い一体で、他の二体はその儘屋敷内の何れかに埋められた儘でその所在は判らなかつた。為に石の祠を建て、元宮八幡として祀つてあつた。

その後四代信寛の代に下女が、元宮八幡の森の茶の水の下から一体の木像を掘り出し、水で洗うと、急に熱を出し腹の痛みを訴え、早速お被すると腹の痛みは止んだ。この御神体は背が低く尊氏の守神としたものと云われ、西郷氏の神棚に祀られたが、尚一体は邸内に埋つていると云うが、未だに判らない。津久見徳浦の薬師寺家には尊氏が東上の時大友が尊氏に附随させた豊後の軍勢、即ち角達一揆の名護があり、薬師寺氏はその一方の大将であつた。

### 梅牟礼城の合戦(一)

探題大友義鑑の惟治叛反を平らげよとの命で梅牟礼城攻略に向つた白許近江守長景は、二万の兵を連れて、大永七年正月上旬津久見の坂を越し、床木に着いた長景は熟睡もせず復すの番を置いて警戒した。一夜をあかし、先陣が床木を発ち、後陣は遙かに引き退いて大友の紋所魚葉の旗を押し立て、大将長景は鎧に身を固め遅まじしい馬に乗ってしつしつと進んだ。小田ヶ峰、野田の西から北の隅床木山、宮の河内に陣所を設け、大将長景は川殿寺に本陣を置き、平井、土崎の両山に後陣を構え尾崎、谷口に一旗一旗たむろを張り下知や今やおそしと待ち受けた。

敵も味方も軍使が馳せ違い矢合せ決まって寄手は既に城外に押し寄せ、えびら、なぐいをたたき、関を作つて打ち寄せると、城内でも関を作つてこれに応じた。

然し梅牟礼城と言うのは峯聳え、岩は岬々として劔を立てたよう  
で、歌、牧笛の輩でも易くは登り難い山である。まして城郭を築き、兵  
を入れて防ぐからには、攻め入ることは六ヶしく、唯城をねらんで控  
えていた。この時城中から木戸を開いて打って出て、入り乱れて戦え  
ば寄手は長途の旅に人馬共に疲れていて働ぎ得ないのに反し、城方は  
待ちに待った戦であったから、十騎が一騎にもかけあわず暫くの間  
に寄手の大半は討たれて了った。長景は斯様な事では勝利は覚束ないと  
目を吹かせ太鼓を打って軍勢をまとめ、陣を引いてその日は人馬を休  
ませた。

## 梅牟礼城の戦 (二)

長景は数日に渡って攻めたが、城方は思いの外強く、手立てを変え  
て攻めれば城方は手立てを変えて防ぎ、毎日攻め手の負けとなり、相  
当の軍勢を討たれ傷つき攻めあぐんでいた。或時は深田一党の者に討  
たれ、敵の奇襲に敗れ、来る日も来る日も合戦は続けられ、いつも寄  
せ手の負けとなった。大将長景は城に水の出る道理のない事を考えて  
水の手を止めたが、城兵は水のない事を悟られたら大変と思ひ、馬を  
城外に引き出して、馬を米で洗って見せ、寄手は之を水と誤り、水に  
は困っていないと判断して水の手を守るのを止めて了った。

長景は長考の末和談を申し込む事を考えつき、偽りの起請文を書き  
城方に送り、惟治を城から誘き出し、尾高千山に待ち伏せた者に、急  
に襲わせ惟治王従を殺してしまつた。

惟治の死後色々の祟りがあり、神に祭ってからは暫く静になった、  
討手の大将長景は急に病になり、一高熱を發して身体焼くが如く、一

昼夜足ずりして死んでしまつた。

堅田の塩月まで逃げていた千代鶴は、惟治が戦死したのを通知する  
使いを討手と見間違ひ、これ迄と割腹して果てた。哀れと言うほかは  
ない。

梅牟礼城の戦は諸説あり歴代鎮西要略には「大永六年豊後國梅牟礼  
城主佐伯惟治大友に欺き、密かに菊池義國に通じ、星野親忠と約し、  
菊池肥後守義國は肥後に、星野筑後守親忠は筑後に、佐伯惟治は豊後  
に起り共に府内に攻め入らんと謀つたが、事前に露見し、大友屋形は  
白杵長景、佐伯惟常に命じて兵一万を以て惟治を討たせた。吉弘、  
都甲、当刀の三家が先鋒となり、城を囲んだが肥後、筑後の援兵を待  
つ為か城は固く守って落ちなかつた。云々」と惟治の謀反を書いてい  
る。

## 長池の大蛇

梅牟礼落城と共に惟治の子千代鶴は、汐月の寺田に隠れていたが、  
黒沢の山に居る父を恋しがり、父を求めて二人の家来を連れて西野(ハ  
サイノ)迄行った時、騎馬一騎馳せ来るのを追手の者と思ひ誤り、家  
来の者の進言に自刃し、家来二人もその跡を追って割腹して果てた。  
この千代鶴の最後も知らず梅牟礼落城久しく別居していた乳母は、千  
代鶴の安否を気ずかい、西野迄訪ね来てこの有様を眼の前に見て、悲  
泣の余り近くの長池に投身して果てた。

或る日村の若者が山から帰りにこの池の傍を通る時、誤って腰の鉈  
を池の中に落してしまつた。苦者が鉈を求めて池の中に潜ると、今お  
湯から上つたばかりの美人が半裸の儘鏡の前で髪をくしづけている所

であった。若者が恐る恐る鉦を御存知ないかと伺うと、美人はくしけずる手を休め、「今少しの事でその鉦でこの鏡を破る所であった。私は千代鶴君の乳母でこの池に沈んで蛇となり、千代鶴の菩提を永えに弔う者である。再び斯様な刃物を池に落さない」と約束するならば鉦は返して上げましょう」と云って鉦を返した。それ以来村人はその祟りを恐れてこの池に物を落すとか池の魚を釣る事もなかった。乳母が入水に当って衣をかけた松を衣懸けの松と云い、千代鶴が自刃の時に紅に染った石は今尚紅に染っていると云う。西野の千代鶴の墓を訪れた時その石や長池を訪れて真偽の程を確かめるのも読者の興味であろう。

## 耳川の戦

佐伯十二代惟教は惟常の子で紀伊守と称し、宗天と号した。天正六年十月宗麟は島津義久を撃ち、伊藤の旧領を奪回しようといつて八ヶ国四万三千の兵を率いて臼杵を發し、日向に向い務志賀を本陣とし、三陵の城、坪屋城を守らせ、佐伯惟教と田北鎮周をして左右の先鋒として、島津義久の將、山田新助の守る高城に向わした。

大会戦の前夜諸將が会谈の時意見が纏らず、右備の大將田北鎮周は左備の大將佐伯惟教の本陣に注進して宗麟の命に従わずとの意見に反対し、敵の動きを待たず、こちらから進んで戦うべきであると言ひ、各々の大將は意見まちまちで結局まとまりがつかなかった。明くれば十一月十二日田北鎮周は川の下瀬を渡り、川岸の敵を破って進んだ宗天は鎮周が川を渡るのを見て止むを得ず上瀬を渡り、鎮周、宗天の兵は薩摩の六千の兵を破り、大將を打ち取り、敵を敗走させ敵は右に隠しおいた兵は横槍を入れ、高城からは山田新助が大將となって城中か

ら繰り出し、義久は川上から旗本を出して豊後勢の陣所の道をさえぎってうった。豊後勢の一方に大沼があった。敵は地理にくわしく豊後勢をこの沼に追い込むように戦った。豊後勢は次第に討たれ宗天父子三人も遂に討死し、鎮周初め一統も多く討たれ、或る者は戦わずして引き退くと言う戦であった。

かくして薩摩軍は大勝し、宗麟は大敗し、務志賀を發し遁れて臼杵に帰ると言う次第であった。この戦で豊後勢の討たれた者四千人、薩摩方一千人であった。

この戦を見て或る者はこれは宗麟が南蛮の耶蘇を信じて、士卒は神社仏閣を破却し、宗麟の家運は傾き大敗したのは当然であると云った。